

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00416

研究課題名(和文) 21世紀英語文学におけるポストヒューマンズムの思想的展開 物質としての生命

研究課題名(英文) The Historical Development of Posthumanism in 21st Century English Literature: Life as Material

研究代表者

渡辺 克昭 (Katsuaki, Watanabe)

大阪大学・大学院人文学研究科(外国学専攻、日本学専攻)・教授

研究者番号：10182908

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：ポストヒューマン的想像力においては、生命溢れるアクターと生命なきアクターの異種混濁的なメッシュが張り巡らされ、絶滅と進化が交錯する惑星の悠久の時間相において、「物質を志向する生命」と「生命を志向する物質」のクロスロードが現出している。そこでは、自らを構築する物質性により自らを変容させることを宿命づけられた人類のアポリアが前景化され、自らの残滓でもあり他者でもあるポストヒューマンとの新たな共生の枠組みが、身体、記憶、テクノロジーを複合的に巻き込んで模索されている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、21世紀英語文学を対象に、ポストヒューマンとヒューマンの錯綜した多次元的なインターフェイスに着目し、フーコー、デリダ、ドゥルーズ、アガンベンなど、現代思想史の論脈をさらに拡充することにより、人間が自らの存在基盤の臨界にいかに向き合うか、学際的に究めようとするものである。急速に進化を遂げつつあるAIとの関係も見据え、新たな人間の存在基盤を再考しようとする本研究の意義は、多様なテキストに潜むマテリアルと人間の入り組んだ接点をめぐる思索を解きほぐし、単一の分野では十全に展開できないポストヒューマン研究の新たな地平を、文学・文化研究を通して拓こうとするところにある。

研究成果の概要(英文)： Within the context of posthuman imagination, a heterogeneous network of living and non-living actors is intricately interwoven, in which extinction and evolution are inextricably entangled within the enduring temporal aspect of our planet. The enigma of humanity's destiny, determined by their inclination to transform themselves through their own materiality, comes to the forefront at the intersection of "life-forms oriented towards matter" and "matter-oriented life." In this context, a new framework for coexistence with posthuman beings, who represent both remnants of oneself and others, is currently being explored, requiring a complex integration of body, memory, and technology.

研究分野：アメリカ文学・文化研究

キーワード：ポストヒューマン ドン・デリエロ マーガレット・アトウッド スティーヴン・ミルハウザー ダン・ブラウン バートルビー ゼロK オリクスとクレイク

1. 研究開始当初の背景

20世紀後半以降、自然科学の多様な分野でテクノロジーが加速度的に発展するとともに、人間とはいったい何かという、人間存在の限界を規定してきた境界が根底から揺らぎ始めた。そうした背景にあるのは、人間の生命が物質によって構築されている以上、自由に改変することが可能であり、人間の能力は無限に拡張できるという思考の枠組みである。それによれば、人間の身体と精神と世界を継ぎ目のないものとして接合することが究極の目的となる。そうした現代のポストヒューマン的状况は、生命科学を駆使し、人間の能力を飛躍的に拡大させ、身体性のありようを改変しようとする生命工学と、仮想世界と脳を接続し脱身体化を志向する脳科学という、互いに逆行するベクトルを孕んだ二つの領域において進行している。

「我々は既にサイボーグである」という主張でつとに有名な Donna J. Haraway の一連の著作は、人間と動物、有機体と機械、物理的なものと物理的でないものとの区別といった旧来の境界を超越し、西洋思想の中核として記述されてきた「普遍的な」人間像から脱却しようとする。「サイボーグ宣言」は、80年代の科学技術と社会主義フェミニズムという文脈を抜きにして考えられないが、21世紀におけるポストヒューマン論は、そうした知見を基盤としてさらなる展開を見せる。そこに微妙な影を落としているのが、いわゆる「2045年問題」、すなわち Ray Kurzweil が *The Singularity is Near: When Humans Transcend Biology* (2005)において唱えた「技術的特異点」をめぐる問題系である。「収穫加速の法則」により、諸技術が指数関数的に発展を遂げた結果、コンピュータ技術が爆発的に進化し、21世紀半ばまでに「技術的特異点」に到達するという。その時点で全人類の知能をも凌駕するコンピュータは、人類の知性や存在の有りようを刷新し、コンピュータ知能と融合した超知性を備えた超人類が誕生することになる。まさに映画 *Transcendence* (2014)が示すように、不可知のパラダイム転換の特異点に人類は今まさに差し掛かろうとしている。Kurzweil によれば「特異点とは、我々の生物としての思考と存在が自ら作りだしたテクノロジーと融合する臨界点であり、その世界は、依然として人間的ではあっても生物としての基盤を超越している。」

2. 研究の目的

人類はそれ自体、長い進化の時間相における一つの位相に過ぎず、Agamben の言う「剥き出しの生」としてのゾーエでありながら、自らに神のごとく介入し操作するビオスでもあることに鑑みれば、道具の使用以来、人間は常に自らを変容させる自己のテクノロジーを有するポストヒューマンとして存在してきた。21世紀において、非生物的な透明なテクノロジーと継ぎ目なく融合した脳は、共進的に可塑性を増大させ、単に認知システムのみならず、心のデザインをもより開かれたものへと飛躍的に進化させていく可能性も否定できない。流動する生命の淵源としての Deleuze の「器官なき身体」や、Morton の「自然なきエコロジー」の思考を発展的に適用すれば、物象化された人間ならざるものが、物質としての生命である人間の世界に入り込むという状況は、従前の本質主義や生氣論を乗り越え、かつてない人間のあり方をいかに提示するのか。生命すら操作する力を授けられた人間は、創造力と引き換えに想像力を枯渇させているようにも見えるが、ポストヒューマン的状况への不安と憧憬は、21世紀文学の無意識にいかにか働きかけ、どのようにポスト・ポストモダニズムを惑星思考によって開化させるのか。あらゆる事象は物語化された物質の相互作用により生起するという視座に立ち、新たな人間の存在基盤を再考しようとする本研究の意義は、多様なテキストに潜む物質と人間の入り組んだ接点をめぐる思索を学際的に丹念に解きほぐし、単一の分野では十全に展開できないポストヒューマン研究の新たな地平を拓こうとするところにある。

3. 研究の方法

本研究は、物質としての生命が織りなすアポリアを手掛かりに、思弁的实在論、マテリアル・エコ批評等も視野に入れ、「人類以後」をめぐる無意識を多様なテキストから抽出し、共生の枠組みを提起しようとするものである。より完璧な人間を創出しようとする人間増強は、人工知能の開発や遺伝子操作などを通じて、生殖、教育、医療、身体を巻き込んだ人類史上類を見ないパラダイム転換をもたらした。自分のゲノムさえ特別扱いしない技術衝迫の遺伝子をもつ人類は、今世紀に入って、種として質的な変化を遂げる「人類以後の存在」に取って代わられるのではないかという不安に直面することとなった。SF が現実のものとなりつつある現在、本研究は、21世紀英語文学を対象に、ポストヒューマンとヒューマンの錯綜した多次元的なインターフェイスに着目し、Foucault、Derrida、Deleuze、Agamben、Morton 等を基軸に現代思想の新たな展開を模索することにより、人間が自らの存在基盤の臨界にいかにか向き合うかを学際的に究めることを特徴とする。そのために、21世紀の日常に加速度的に浸透するポストヒューマニズムへのヴィジョンが、多様な領域と問題系においていかに複雑で交錯する情動を発動するか、資本主義の未来との関係において、そのマトリクスと生成のダイナミズムを以下の4点に留意しつつ解きほぐしていく。

(1) 従来、技術や生命倫理の観点から論じられることの多かったポストヒューマニズムを、その

ようなテーマに必ずしも特化していない多様なジャンルのテキストからも掘り起こし、自己のテクノロジーがもたらすポストヒューマンとヒューマンが織りなす錯綜した接点に生じる情動や無意識を現代思想史の文脈から逆照射し、多角的に考察を行う。

(2) 身体化か脱身体化か、ヒューマンかポストヒューマンかという二項対立を脱構築し、自らの残滓でもあり他者でもあるポストヒューマン・ボディの問題系を具体的に物語の文脈に即して解きほぐし、資本主義の未来と絡めて人文的知を自然科学の知に接合する。

(3) 生命のありように関わる現代思想の最前線の知見を積極的に援用することにより、ポストヒューマンをめぐるとのバイオポリティクスを立体的に俯瞰すると同時に、時代精神を参照する映画、TVドラマ、広告も射程に入れ、ポストヒューマン時代の生命哲学を明示的ではないテキストからも抽出する。

(4) 「物質としての生命」という唯物的な視点に依拠しつつ、可塑的な生命をもつ人間が、物質的環境との交渉においていかなる相克を感じ、どのように折り合いをつけるのか。最新のジェンダー/アニマル・スタディーズの知見も活かしつつ、マテリアルを共通基盤として展開される多様な有機/無機的存在と、人類の新たな共生関係を模索する。

4. 研究成果

論文「ポストヒューマン・デザインの地平 ダン・ブラウンの『オリジン』におけるAIと「かぐわしき科学」のゆくえ」においては、ポストヒューマン時代の到来を視野に入れ、Dan Brownの*Origin* (2017)に登場する未来学者、Edmond Kirschが人類に突きつけた問いかけ、すなわち人類の起源と人類の運命に関して、彼が提起する「かぐわしき科学」が、いかにポストヒューマンの光と翳を炙り出しているのか、最先端テクノロジーと人類の叡智を接合して創造されたAI、Winstonが駆使する3つの「アート」を手掛かりに分析を行った。

『揺れ動く<保守> 現代アメリカ文学と社会』に所収された論文「囁き続ける水滴—ドン・デリーロの『ゼロK』における「生命の保守」」では、未来に蘇る永遠の命を夢見て人体冷凍保存施設に眠るポストヒューマンを描いたDeLilloの*Zero K* (2016)を取り上げ、絶滅と進化が交錯する地球の悠久の時間を射程に入れた本作において、凍結されたはずのマテリアルとしての器官なき身体が、Deleuze的な潜在力を秘めた「器官なき身体」へといかに変貌を遂げていくかを考察した。アーティスのモノログにおける囁きを担う水滴の一粒一粒が、様々なポテンシャルを含みもつ未分化の個体として、人類にいかなるパラダイム転換が起こっても、しなやかに流転する生命の満ち干という抗しがたい流れを作り出していることを明らかにした。

論文「蘇るポストヒューマン・バートルビー ドン・デリーロの『ボディ・アーティスト』を導きの糸として」においては、Jacques Derrida、Gilles Deleuze、Giorgio Agambenといった現代思想家たちが、いかにHerman Melvilleの短編“Bartleby, the Scrivener”を受容してきたかを俯瞰したうえで、Don DeLilloのノヴェラ、*The Body Artist* (2001)を導きの糸として、この問題作を21世紀の現在から逆照射し、ポストヒューマンという視座より新たな読みの可能性を追求した。本論では、参照先のないBartlebyとMr. Tuttleに共通する孤児性、亡霊性、機械のごときコピー性、拒食性といった事象を検証したのち、無為の「異言」により、然りでも否でもない不分明の中間領域を拓く彼らのスピーチ・アクトを、非文法性、独創言語、トートロジー、時間などといった論点から考察した。そうした議論を通じて、“host/hostess”と“hostage”が織りなす「歓待」がいかにメルヴィルの語り手の“humanity”を脱構築し、zoeのごとき書写人が、どのような潜在力をもってポストヒューマンとして蘇るのかを明らかにした。

論文「遺伝子のデザイン、記憶のデザイン 『オリクスとクレイク』における黄昏の代理「神」、スノーマン」では、パンデミックによる人類の絶滅とポストヒューマンの誕生を描いたMargaret Atwoodの*Oryx and Crake* (2004)を取り上げ、「神」のごとく遺伝子操作を施すCrakeの遺伝子のデザインと、主人公Snowmanの記憶のデザインがいかに錯綜した関係を切り結び、新人類Crakerの存在がSnowmanの倫理観にいかなる揺らぎをもたらすのかを論じた。それを踏まえ、滅亡と再生の渚に佇む主人公の魂の在りようにどのような揺さぶりがかけられているのか分析を行なった。

『脱領域・脱構築・脱半球 二一世紀人文学ために』に所収された論文「錯乱のコズモポリス—『マーティン・ドレスラー』におけるポストヒューマン的身体としての「ホテル」」では、Steven Millhauserの*Martin Dressler* (1996)を特徴づける一連のホテル表象に着目し、主人公の拡張する身体としてのホテルがいかにマニエリスティックな変容を遂げ、内破するに至るか、DeLilloの*Cosmopolis* (2003)を参照しつつ、ポストヒューマン的身体という観点から、共振する二つの世紀転換期ニューヨークの文脈に位置づけて読み解いた。コズモポリスと一体化した主人公が、拡張する身体としてホテルを創造するたびに、諸々のアクターの錯綜した力学のネットワークが組み直され、彼のミニチュア都市は創造と破滅の種子を交差させるポストヒューマン的トポスとなる。グランド・コズモの地下層では、ネットワーク化された生命体のように日々更新され続ける生命溢れるアクターと、生命なきアクターの異種混濁的なメッシュが張り巡らされており、従来ポストヒューマンという視座から論じられることのなかったこの小説は、主人公の「ホテル身体」化を通じて、「物質を志向する生命」と「生命を志向する物質」のクロスロードとして機能していることを論証した。

論文「『アメリカン・デモクラシーの逆説とそのゆくえ Mao II (1991)とThe Silence (2020)における自己免疫と来るべき「未来」』」では、デモクラシーにresilienceを与える他者の召喚と、

fragility をもたらす自己免疫が、Don DeLillo の *Mao II* においていかに作動するかを検証した上で、ポストメディア時代のデジタル・テクノロジーとの関係において DeLillo の最新作、*The Silence* を取り上げた。デモクラシーの苗床にしてポピュリズムの温床でもあるデジタル・テクノロジーのブラックアウトが何を物語っているのか、ポストヒューマン的言説と絡めつつ、来るべきデモクラシーの「未来」について考察した。

本研究を通して、ポストヒューマニズムは、自らを構築する物質性により自らを変容させることを宿命づけられた人類のアポリアを浮き彫りにする魅力的な文学的テーマであるとともに、その延長線上にデモクラシーの既成概念そのものにパラダイム転換を迫る様々な契機を孕んでいることが明らかになった。Latour の *Making Things Public: Atmospheres of Democracy* (2005)、他なるものとしての地質学的な力との相互的浸透を論じた Elizabeth Grosz の *Chaos, Territory, Art* (2008)、Timothy Morton の *Humankind: Solidarity with Non-Human People* (2017) などから得た新たな問題意識のもとに、さらなる研究プロジェクト「ポストヒューマン文学における異種混交とデモクラシー アクターネットワークの生成」を着想するに至った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 渡辺克昭	4. 巻 46号
2. 論文標題 「アメリカン・デモクラシーの逆説とそのゆくえ Mao IIとThe Silenceにおける自己免疫と来るべき「未来」」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『英米研究』（大阪大学英米学会）	6. 最初と最後の頁 pp. 1-26.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡辺 克昭	4. 巻 45号
2. 論文標題 「遺伝子のデザイン、記憶のデザイン 『オリクスとクレイク』における黄昏の代理「神」、スノーマン」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『英米研究』（大阪大学）	6. 最初と最後の頁 pp.39-64.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊 克昭	4. 巻 第 44号
2. 論文標題 「蘇るポストヒューマン・バトルビー ドン・デリーロの『ボディ・アーティスト』を導きの糸として」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『英米研究』、大阪大学英米学会	6. 最初と最後の頁 pp. 31-59.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡辺克昭	4. 巻 第 43号
2. 論文標題 「ポストヒューマン・デザインの地平 ダン・ブラウンの『オリジン』におけるAIと「かくわしき科学」のゆくえ」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『英米研究』	6. 最初と最後の頁 pp. 29-57.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 渡辺克昭
2. 発表標題 「アメリカン・デモクラシーの逆説とそのゆくえ Mao IIとThe Silenceにおける自己免疫と来るべき「未来」」
3. 学会等名 日本アメリカ文学会第60回全国大会シンポジウム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 渡辺 克昭
2. 発表標題 「錯乱のコズモポリス 『マーティン・ドレスラー』におけるポストヒューマン的身体としての「ホテル」」
3. 学会等名 日本アメリカ文学会関西支部10月例会シンポジウム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 渡辺 克昭
2. 発表標題 「21世紀デリーロ文学におけるポストヒューマン的転回 アトウッドとの比較において」
3. 学会等名 大阪市立大学文学部英文学会第48回大会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 渡邊 克昭
2. 発表標題 「蘇るポストヒューマン・バトルビー ドン・デリーロの『ボディ・アーティスト』を導きの糸として」
3. 学会等名 日本アメリカ文学会関西支部第63回大会、フォーラム（於：龍谷大学、2019年12月14日）「メルヴィルとホイットマンの時代 生誕200年を記念して」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡辺克昭
2. 発表標題 「呼び交わす巨匠たち ペロー、ヘミングウェイ、デリー口における 死 のアポリア」
3. 学会等名 日本ソール・ペロー協会第30回大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 渡辺克昭	4. 発行年 2021年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 545
3. 書名 『脱領域・脱構築・脱半球 二一世紀人文学のために』（共著）	

1. 著者名 渡辺克昭（共著）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 春秋社	5. 総ページ数 324
3. 書名 『揺れ動く<保守> 現代アメリカ文学と社会』（共著）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------